

## 第百十一 硬い肉

何事もお登和嬢に頼らざれば料理の道を明らめ難しと大原は中川の家へ到り見るに、折しも來客にやありけん、沓脱石の上に女の駒下駄三足並びて玄關口の二疊間に腰元らしき女の行儀正しく控へたり、中より漏るゝ女の聲、一人は確に小山の妻君、ハテナ、是れは必ず廣海子爵の令嬢が家庭料理の稽古に來て居るのだな、何んな令嬢だか一つ見度ひものだと大原は案内を乞ひて座敷に入りぬ、小山の妻君が先づ「是れが大原満さんで」と子爵の令嬢へ紹介するに「ハア左様でいらつしやいますか」と玉江嬢の挨拶せしは豫ねて自分の噂が令嬢の耳に熟せしと見えたり、如何なる噂にやあらむ、大食の噂か、それとも雜誌計畫の準備に小山君が我身とのお登和嬢の關係より今は田舎娘の擒となれる事迄話せしかと心は少しく穩ならねど玉江嬢の様子を窺ふに冷かなる心にて我身を迎へしとも覺えず、先づ目に付くは其の品格の高き事なり、左れども傲慢の氣は無く、如何にも懇懃にして愛嬌あり、色は白き方にあらねども淺紅を帯びて強壯らしく見ゆるは肺病的の美人に異り、眉と眼の清くして涼しき、□元の締りたる、鼻の格好よく隆き、何處とて申分はあらざるも其割に際立ちて引立たぬは背中の中の少しく圓みを帯びて首が前に屈める故ならん、我邦の婦人は誰しも此癖あり、可惜美しき姿を自ら損するも丈高しと人は言はるゝを厭ひてならん、丈は高きこそ立派なれ、況して此令嬢、顔の輪郭の正しく豊なる、襟元首筋のなぞへにして姿好き、もしも今一層の粧飾を加へて晴れなる衣服を被せしめなば如何にその姿の美しからんと大原は心に未來の美人を想像す、小山の妻君大原が竹の皮包を携へたるを見て「大原さん、何を持っておいでゝす」大原「僕は今料理の方法をお登和さんに教らうと思つて鶏の肉を持つて來ました」妻君「それは惜しい事を、私も少し早いと鶏のお料理を拝見するのですしたつけ」大原「ところが此の鶏は肉が硬くつて何うしても食べられません、其の代り馬鹿に廉いのて四百目あつて二十錢の鶏です、お登和さん、此肉を一つ見て下さい、

何う云ふ料理にしたら食べられる様になりませう」と竹の皮を開いて肉を示す、お登和嬢手に執りてよく眺め「大原さん、是れは鶏肉屋仲間ツメと云つて迎も食用にならん雄の老鶏です、丸で鍋へ入れてスーブにでも出すより外に食べる事が出来ません、是ならば二十銭位で一羽買へます、悪い鶏肉屋では此肉を外肉へ少し宛交せて賣ますから何しても噛み切れない様な肉があるのです、斯う云ふ物は迎も料理の原料になりません、小山の奥さん、先程もお話申した通り家庭料理には原料を選ぶ事が第一の必要で、同じ値段の品物を買つても原料に善悪の相違がありますからよく／＼吟味しなければなりません、支那の袁隨園と云ふ人の料理法に一席の御馳走は料理人の力が六分で賣物屋の力が四分だとしてあります、成程其位でせう、如何なる上手の料理人でも此肉計りは美味しく食べさせる工風がありません」と廉物の鶏肉が飛んだ引合の役に立つ、子爵の令嬢「何んな肉で御座いますか」と悪き物を知つて置くも研究の一つ、大原詮方無く「サア何卒後學の爲めによく御覽下さい」と人々の前へさらけ出しぬ、

## 第百十一 お稽古

物は注意に依りて研究の種となる、大原の携へ來りし鶏肉も時に取つてのよき手本、料理法の稽古には後の戒めの材料たり、大原は鶏肉を示して料理談の話題を惹出だし「小山の奥さん、今日は何ういふお料理が出来ました子」妻君「ハイ色々出来ましたモシお嬢さん、今の料理を残らずお覚えになりましたか、お稽古の爲めですから一度其手續を言つて御覽なさい、最初は松露豆腐のお吸物でしたつけ子」と忽ち料理法の復習を始め、玉江嬢も一生懸命なり「ハイ、大概是覚えまして積りですがモシ間違つたら先生に直して戴きませう、松露豆腐は先づお豆腐をよく固く絞つて裏漉へかけて鹽とお砂糖を少し宛入れて松露位の大きに丸めるのです子、それから布巾の上へそれを並べて水を切つて十でも十五でも玉子焼鍋かフライ鍋へ油を引いて揚がして揚げるのでしたつけ、其時側へ井鉢に水を入れて置いて揚がったお豆腐を其水の中で洗つて笹へあげて爾うして青味や椎茸位と一緒に吸物の種に致しますのでした子」お登和「左様です、それから鯖のフライは

お分りになりましたか」玉子嬢「ハイ、鱈の切身へ先づ薄鹽をザツと振つて置いて三十分も過ぎて布巾でよく水氣を拭き取つて米利堅粉をつけて玉子の黄身へくるんで今度はパン粉をつけてフライ鍋のバターで揚るのですが、略式にすれば玉子へくるんで米利堅粉とパン粉を一緒につけても宜し、パンコ計りでもよし、玉子の黄身で米利堅粉か或はウドン粉を釋いて天麩羅にしても宜し、揚る時もバターの代りに豚の油のラードでも宜い上等にすればサラダ油が宜いので御座いますネ」お登和「左様です、よくお覺えになりました、それから竹の子の梅肉和は」玉子嬢「竹の子のゲンノウと云小さい柔いのを皮付の儘糠で湯煮て蒸らして置いてそれを小さく切つて梅干の肉の裏漉にしたのと白味噌とで和へるのです子、それから鰈の餡掛は鰈の身を三枚に卸してお酒とお醤油と水とで煮て一旦お魚を皿へ取つて跡の煮汁へ葛を溶いて入れてお魚へ掛けて青海苔か或は山椒の粉を振かけるのですか」お登和嬢「左様です、大概なお魚は爾うして宜う御座います、伊勢海老なんぞも餡掛にすると結構です、モ一人つのお料理は」玉子嬢「牛肉の酢味噌です子、あれは腰の肉か或は上等にすればロースが宜いのですが、その肉を薄く切つて鐵網へ載せて強い火で両面をザツと焼いて酢味噌を拵へて付けるのです子、急ぐ時には手輕に出來て調法で御座いませう、宅へ歸りましたら今日教へて戴きましたものを一々拵へて父に食べさせます、父も嘸悦びませう、私どもには古くから居ります下女頭の老婆が一切臺所の事を仕切つて毎日の食物を拵へますが何時でも同じ様な料理でお魚は煮るか焼くかの外に存じません、客のある時は料理屋から取寄せますし、客がありませんでも父は毎日西洋料理屋から二三品づ、取寄せて戴きます、是れからは毎日宅で料理する事に致しませう」と今の上等社會は多く斯の如き風ありて御馳走は料理屋の専有物と思ふ、是れが家庭料理の進歩せざる所以、

## 第一百十二 取持顔

家庭料理の進歩せざるは文明の進歩せざるなり、我邦の風習として衣服の裁縫は家庭婦女子の専有物とすれども御馳走の供給を料理屋に仰ぐもの多し、衣服は他人の手に成りしものも衛生上に害無けれども、

食物は最愛なる家族と大切なる賓客の口に入る、もの、萬一危険の事あらば人生百年の身を誤る、然るに一家の主婦たるもの外より取寄せたる食物が如何なる臺所にて製せられ如何なる料理人の手に成りしを顧みず、手数のかゝるを厭ひて出所不明の御馳走を家族に與へ來客に供する如きは心無き業なるべし、お登和嬢は子爵の娘に家庭料理の手續を教ゆると共に家庭料理の精神をも傳ふる積り、「モシ玉江さん、貴嬢の被仰る通り毎日料理屋から物を取寄せて召上るのとお家でお料理をお拵へになるのとは第一に入費の違ひが大層で御座います、ちよいとしたお刺身を作りまして料理屋から一人前取寄せる値段で魚屋から切身の鮮しいのを買つて家で作りますと三人前は確に出來ます、それから味も大層違ひます、家で色々な料理を丁寧拵へますと何んな料理屋のお料理も決して及ばない程に美味しく出來ます、何故と申すの外で料理したものは何程高い金銭を出しても家で料理したもの程親切の心が籠りません、家庭料理の貴いのは何の料理にも親切の心を籠めるのです、斯うしては人の身體に悪くからう、斯うしては味が抜けるだらうと親切の心を忘れないで最も衛生的に最も經濟的に美味しい物を作るのが家庭料理の精神です、家庭料理をお習ひなさるには是非とも生理學や衛生學を概略でもお覚えになつて此の食物は何うして消化される、何うして身體を養ふ、是れでは害になるとか益になるとか云ふ事をお覚えにならないと不可ません、兄が居りますと爾う云ふ事に委しう御座いますから色々お話も出來ますけれども今日は生憎不在で残念で御座います、然し程無く戻りませうから緩々お遊び下さい」と頻に玉江嬢を引留むるは兄の中川を嬢に近づけんとする下心、小山の妻君も亦た深き心の無きに非ず、「モシお嬢さん、此方の中川さんは色々な事を御存知で何んなにお話が面白う御座います、お登和さんが一つお料理をなさると中川さんがそれに就て生理上の原則から衛生學や醫學まで四方八方の講釋が始まります、折々は御自分の主張なされる風流亡國論までお料理の引合に出る事もありますよ、早くお歸りなされば宜いのに」と先づ其の人となりをお吹込み頻に歸宅を待ちける處へ主人の中川漸く外より戻り來れり、玉江嬢も昨日入門に來りし時鳥渡中川にも逢ひたれどもまだしみ／＼言葉を交へず、今日は早くより來りて料理の稽古を為し、自分は晝前に歸らん心なりしも初めての料理なればその味を試みられよとお登和嬢に引留られて心ならずも長居

せしなり、廣からぬ家とて中川も來客に對し席を避くる事もならず、同じ座敷に入りて玉江嬢等と談話を交へしが小山の妻君取持顔に「中川さん、今迄貴君のお歸りを待つて居たのです、貴君がお歸りになつたら何か面白いお話しをして戴き度いと思ひまして子、生理學や衛生學の六か敷いお話は追々料理の時に聞き申すとして今日は何か女の身の為めになるお話をなすつて下さいませんか」

## 第一百四 美人法

中川は平生談話好きなり、一たび長廣舌を搖かせば雄弁滔々停る處無し「左様です子僕の話は何時でも小言交りのお談義ですから餘り面白いと云ふ譯にはなりませんが然し注意してお聞きになると幾分か人の為めになる事は御座いませう、それでは一つ美人になる法と云ふ事をお話し申ませうか子」小山の妻君「それは何より結構です、私は早速其法を伺つて實行致しませう、オホ、然し食物に注意して内部から顔の光澤を出すと云ふお話は先日伺ひましたが今日は其外の事ですか」中川「ハイ其外の方法です、今日はお嬢さんもお在ですから娘さんの為めになる事をお話し申しませう、その代り話の銚が何處へ八つ中りしてお耳に障るかも知れませんが道理の言ふ事と思召して決して感情にかけては不可ません、僕の云ふ事はよく人に八つ中りするから憎まれ口を利くと思われて困ります」小山の妻君「そこは私どもの主張する感情亡國論で戒めなければならん所でせう、今の世は何でも感情で人の事を評するから溜まりません、然し此には爾んな人が一人もありませんから御遠慮無くお話し下さい、美人になる法とは何う云ふ事です」中川「是れも私の理想の一つですが我邦で美人と云ふと顔が綺麗だと云ふ點を第一に置いて身體の事を問はない位です、だから肺病の女も美人と稱せられ、猫背の女も美しいと褒められます、生理上から見ては肺病家や猫背に美と云ふ點が少しもありません、是れも一つには美と云ふ事を風流の眼から觀て、あの女は嬌態衣に堪えざる如しなんぞと病人的の婦人を喜んだ為めです、私の所謂美は正々堂々たる體格を持つて健康的な姿勢の正しいのを言ふのです、と云つて雲岳女史の様な大女を褒るのでありません、女は背がスラリとして顔の

輪郭が正しくつて首筋から肩の邊が優しくなぞへ形になつて素直に直立な體格を最も健康な徴としてあります、今頃の女學生の様に肩の怒つて居るのは女として不健康な體勢だと申します、美と云ふ中には必ず正しいと云ふ事が土臺にならなければなりません、姿勢の正しいと云ふ事が欠けて居たら決して美人と云ふ名稱を下されません、美人になる第一の手段は我が姿勢を正しくするので、男子にして姿勢の正しいのは先づ軍人でせう、誰でも軍人になると第一番に姿勢を正されまゝ、直立直視と云ふ事は入營第一の教程です、軍人に下を向いて歩いたり、背中を圓くして居るものはありません、西洋の婦人も小供の内から親達に姿勢の事を厳しく正されます、學校へ通ふ時分背中を曲げて歩くと頭の上へ書物を載せて歩かせられます、西洋婦人の歩いて居る姿を御覽なさい、誰でも胸を前へ突出して直立の形でありませんか、我邦の婦人は兎角此の姿勢が悪い、天然の體格が上等でも態々前へ窟んで猫脊になつて歩く人が多い様ですけれどもあれでは美と云ふ事の本體が欠けて了ふから決して美人と云はれません何でも歩く時には胸を突出す位にしてお歩きなさい、坐る時でも少し後方へ反る位にして坐つて居ると自然脊中の骨も直線になつて來ます」と何うやら直接に眼前の人の欠點を擧げたる様に聞ゆ、玉江嬢は我が心に應えけん、默然として深く其言葉を感ぜし如し、

## 第百十五 心の鏡

中川の説く所は眼前一二の人を指せしにあらず、全國の婦人に向つて我が理想を行はしめんと欲するなり、「そこで姿勢が正しくなれば誰が見ても姿の美と云ふ事が現はれませう、然しそれでは見た計りの美人です、其人と話して見て音聲が曖昧であつたり、其の言葉が野卑であつたりしては美人の資格が缺けて了ひます、此節は上流社會の貴夫人令嬢が服装計り立派に着飾つて居ながら極く下品な戀愛小説的の言葉を遣つてアタイそんな事イヤだワとか、何うしたことよなんぞと云ひますがあれを聞くと忽ちお座がさめます、言葉を聞いても綺麗で明瞭で無ければなりません、即ち女は見ても美人、聞いても美人で無ければなりません、然るに段々交際つて見るとその行ひが野卑であつたり、

其の心掛が悪るかつたりすると如何なる美人もそこで忽ち愛想が盡きます、爾んな人には姿の美と云ふ事はあつても心の美と云ふ事がありませぬ、僕の所謂美人は外形も内容も美人で無ければなりません、姿の美しいと同様に心の美しい人で無ければなりません、今の婦人達は顔や手足を磨ぐ事がお手だけれども更に自分の心を磨がかない、姿勢を正す人は出来ても心を正す人が出来ません、心が正しく又美しくならなければ姿勢も首聲も眞に人を感動せしむる程の美はありません、心で身體を眞立にしやう、言葉を明瞭にしやうと思はなければ身體や言葉が獨りで正しくなりません、僕は婦人達に向つて毎日顔を磨くと同様に自分の心をお磨きなさいと勧めます、顔を磨く為めには鏡と云ふものがあります、自分では綺麗だと思つて居ても鏡へ向つて見るといつの間にか鼻の先に黒い墨が付いて居たりなんぞする事は誰にでもありませう、其時は大急ぎで顔を洗ひますが、心も其通りで、自分では正しく美しいと思つて居ても心の鏡に照して見ると飛んでも無い汚點が出来て居る事もあります、自分の姿が鏡に向はなければ分らないと知て居たら自分の心も鏡に照らして見なければ分りません、心の鏡は何處にありませう、矢つ張り自分の心に在るので良心と云ふものです、毎晩寝る時になつたら其口に自分の仕た事を振返つて見て、今日は朝からお晝まで學校へ行つた、歸つてからお友達が遊びに来て色々の話しをしたがあの時ツヒ誰の事を悪く言つたつけ、向ふの人が先生の噂をしたが自分がよく知つて居るだけに先生の内事をツヒ饒舌つたつけ、ア、あれは悪かつた、全く談話の興に驅られて言はないでも宜い事まで口から出た、あれこそ最も慎むべき事だ、明日から氣を付けて再びあんなお饒舌をしまいとかが或はツヒ腹立紛れに阿母さんへ向つて口應へをしたが實に今更濟まなかつた、一時の感情で怒つたり悲んだりするのは動物性の事だ、赤子の事だ、野蠻人同様の事だ、モ一ノ、決してあんな過ちに陥りますまいと誰にでも自分の悪い事と善い事は良心で分ります、夜になつて自分の仕て來た事を良心の鏡に照らして見たらオヤ此にも汚點があつた此にも斯んな悪い事があつたと氣が付いてその悪い處を洗ひ落して明日から善い心にならうと心が心を磨くのです、毎朝顔を洗ふ事を忘れない人は毎晩心を洗ふ事を忘れてはなりません、顔の方は洗はないと直ぐ人に目立ちますから阿母さんも娘さんに和女の顔は不潔いと小言を言ひますけれども娘さんの

心に氣を付けて和女の心に汚點があるよ、洗つておいでと教える人は寡い様です、僕はそれが為めに一の新方法を考へ出しました」と興に乗じて談論風生、此の鹽梅では中々際限あるべからず、